



## 変化と危機に対応できる情報基盤の整備

鶴 正人<sup>1</sup>

ご承知のように、広い意味でのインターネットは社会・経済の基盤として浸透し、「アラブの春」の引き金となり、選挙や市場を左右する道具となり、陸・海・空・宇宙の次に来る新たな戦場と捉えられています。一方、日常生活でも、SPAMメール（既に全メールの9割がSPAMと言われています）、情報漏えい、ネット詐欺、ネットいじめ、などの問題が山積しています。インターネットを含む情報技術の著しい進展は、陽陰の両面での、あるいは陽か陰かも判断できない様々な変化を生みだしており、人間社会と整合した技術・システムとして成熟しうるか？が問われています。しかし、クルマ社会がそうであったように、もはや元には戻れない地点まで進んできました。

情報化や情報基盤の目的として合理化・省力化によるコスト削減を主張していた時代もありました。作業効率向上による雇用削減やペーパーレス化による消費削減などです。しかし、今日の大学における情報基盤の重要性は、教育・研究の広い意味での質を高め、特に教育・研究を取りまく様々な環境の変化や危機（リスク）に素早く対応する点にあります。グローバル化、グリーン化、コンプライアンス、情報公開、BCP（事業継続計画）、ビッグデータ活用など、目新しい言葉の、あるいは言葉としては以前からあったとしても（少なくとも私には）当事者意識がなかった課題に大学も直面していますが、これらの効率的な実現のためには情報技術の有効活用が不可欠です。その際に重要なことは、変化と危機の両方に対応しながら教育・研究の質を高めるには、「コスト」がかかるという点です。一般に利便性・柔軟性と安全性は相反します。技術の進展が助けてくれる場合も多いですが、その場合はお金がかかります。パスワードの管理やソフトウェアのセキュリティアップデートには手間や時間がかかりますし、SPAMメールにも何らかの対応を取られていると思います。ウィルス対応ソフトは全学的に購入しています。大きな危険に晒されている「情報漏えい」に関しては、実はあまり対策がなされていない心配がありますが、成績や試験問題などを日常的に扱う職場としては、今後コストを掛けた対応が必要と思われます。つまり、いかに今より経費を削減できるか、ではなく、これからの変化と危機に対応するために、利便性・柔軟性と安全性の合理的な共存点をいかにコスト効率よく実現するか、が重要です。

このような状況に関して、本学の情報基盤の現状はまだ十分とは言えません。平成24年度も、学外からのアクセスを受付ける公開サーバの登録制度と学外との通信のフィルタの強化、この3月卒業生からの生涯メールサービス、統合IDを利用するシステムの拡大、全学グループウェアの更新（ノーツからサイボーズ・ガルーンへ）、無線LAN環境の整備などが実施され、さらに現在、情報科学センターの「情報工学教育研究用コンピュータシステム」を含む基盤的システムの更新に向けた仕様策定が開始されています。これらに対し、情報科学センター、事務部門、各学部を含む情報基盤に係る職員は、質的・量的なタスクの増大に体力ぎりぎりの所で対応しています。繁忙期のきまったルーチンワークはその一部であり、むしろ定常的に発生する変化への短期的対応を中長期的視点からの配慮を行いながら

<sup>1</sup>情報工学研究院電子情報工学研究系 教授 [tsuru@cse.kyutech.ac.jp](mailto:tsuru@cse.kyutech.ac.jp)

## 巻頭言

進めていく必要が生じています。そこで、器としては、新しく「情報基盤機構」を設け、情報基盤企画室と情報基盤運用室で構成する計画が進んでいます。しかし、器に中身を盛る必要があります。人とお金、そして人の能力を有効に活かし、持続的に人を育てる環境が必要です。このような情報基盤の整備に関して、全学的な関心と理解を高め、一層のご支援ご協力を頂けることを切にお願い申し上げます。